

庄内の乱の語り部 恒吉城跡保存研究シンポジウム



三木 靖先生
(鹿児島国際大学名誉教授)



村田 修三先生
(大阪大学名誉教授)



木島 孝之先生
(九州大学大学院助教)



原口 泉先生
(志學館大学教授)



太田 秀春先生
(鹿児島国際大学准教授)



シンポジウムでは、恒吉城の見方について、①恒吉城独特的構造、②南九州ではあまり見られない敵状豎堀（豎堀が三つ以上連続するもの）、③廃城となつた江戸期以降の城のあり方と3つのポイントをあげられました。大きな空堀（水の張られていない堀）の外に敵状豎堀を構築しました。

当日は、三木靖先生（鹿児島国際大学名誉教授）、村田修三先生（大阪大学名誉教授）はじめ、5名の研究者をパネリストとして招き、午前は城跡の見学会、午後はシンポジウムと二部構成で行われ、約130名の聴衆が集まりました。

恒吉城跡は、大隅町恒吉に位置している中世の山城跡で、市指定史跡です。慶長四年（1599）の「庄内の乱」では、都城を本城とする12外城の一つとして、大きな役割を果たしました。

これまでの恒吉城跡の調査研究の結果を発表する「恒吉城跡保存研究シンポジウム」が12月1日、恒吉地区公民館で開催されました。

恒吉城は、「庄内の乱」当時の緊張状態を表しているとされました。また、恒吉城は、その城としての役割を終えた後も、恒吉麓住民にとって精神的な拠り所となつたと話されました。

「中世の山城」と一般には馴染みが薄いテーマでしたが、研究者の方々が時にジョークを交えながら解説され、多くの方々に恒吉城の持つ「価値」が伝わったようでした。



現地説明会の様子



パネリストの話を真剣に聞く皆さん